

[シンポジウムⅡ]

## ブルガリア語方言話者を訪ねて

菅井 健太

### はじめに

本稿は、2018年6月30日に行われた「中・東欧におけるフィールドワークから／を考える」というシンポジウムで行った報告「ブルガリア語方言話者を訪ねて」のうち、特にルーマニア・ブラネシュティでのブルガリア語方言調査を中心にまとめたものである。

ブルガリア語は、本国以外でも、ブルガリア系住民によってマイノリティの言語として用いられている。これまでルーマニアやモルドバにおいてマイノリティとして暮らすブルガリア系住民の言語を対象に、マジョリティの言語との接触から生じる言語面での影響や変化について、フィールドワークの調査にもとづいた研究を行ってきた。本稿は、これまでのフィールドワークによる調査の概要やフィールドワークを通して思考したことについて述べたものである。また、本稿の最後には、ルーマニア・ブラネシュティで収集した民衆歌謡のテキストを和訳と注釈を添えて付す。

### 1. ブラネシュティのブルガリア系住民

これまでの研究で特に対象としてきたのは、ルーマニアの首都ブカレスト近郊のブルガリア系集落であるが、その中でもっとも重点的に調査を行ったのはブカレストから東へ23kmの地点に位置するブラネシュティ (Brănești) である。

ブラネシュティのブルガリア系住民は、ブルガリア共和国の北東に位置するシリストラ市近郊の集落（カリペトロヴォ、ガルヴァン、ポピナ等）出身のブルガリア系移民の末裔である。彼らは、標準ブルガリア語形成に先立つ18世紀末から19世紀初頭にかけて、戦禍からの避難や税制面での優遇を理由にドナウ川をわたって、ルーマニアへ移住した。それ以来ブラネシュティのブルガリア系住民は、ブルガリア本国はもとより他のブルガリア系集落と隣接することなく孤立していた。今日まで、ブルガリア言語文化を維持するための施策がほとんど行われなかったこともあって<sup>1</sup>、この集落のブルガリア語方言話者は、ルーマニア語とのバイリンガルである80歳代の高齢者に限られている。若い世代はブルガリア語方言を知らず、ルーマニア語しか話すことができない。つまり、ブラネシュティではブルガリア系住民の同化がかなり進行している状態にあるといえ、高齢の話者が死亡することによってブルガリア語ブラネシュティ方言は近い将来に消滅してしまう可能性が高い。

## 2. ブラネシュティでの調査

本稿の筆者は、2012年から2017年までの間、断続的にブラネシュティを訪れ、ブルガリア語ブラネシュティ方言話者を訪ね歩いてきた。そこで、ここではブラネシュティでの調査についての概要を簡単に述べたい。

調査にあたって、まずはインフォーマントとなるブルガリア語方言話者を探さなくてはならない。ブルガリア語方言を解する高齢者はそもそも絶対数が少ないため、ブルガリア語方言話者を見つけること自体がとてつもない困難であった。調査に協力してくれるインフォーマントを見つけることはさらに難しい。当初は怪しまれたり、泥棒扱いされたりすることすらあった。外国人の訪れることが少ないルーマニアの田舎町において調査を行うことの難しさを実感することとなった。町役場で紹介してもらったコーディネーターを通じてインフォーマントを探すことで、調査もようやく軌道に乗るようになった。知り合いやご近所ネットワークを通じて、結果的に14名(男性7名、女性7名)のインフォーマントと出会うことができたのは幸運であった。

ブラネシュティは調査のために何度も訪れたが、一度会ったインフォーマントであっても、訪問のたびに必ず顔を出すように努めた。最初のうちは名前もろくに覚えてもらえなかったが、そのうちメモして覚えようと努めてくれた。さらに、何度か通ううちに、「私の孫が来た!」と言って、あたたかく受け入れてくれるようになった。とはいえ、おばあさんたちに縁談話まで持ちだされたときはさすがに閉口した。何度も通うことで信頼関係を醸成することは、言葉の調査を行う上でも重要である。“よそ者”から“仲間”になることで、外向きの言葉ではなく、仲間内の言葉で話すようになるからである。泥棒扱いされた最初のインフォーマントのところでは、筆者が話すブルガリア語を理解しているのにも関わらず、その返答は全てルーマニア語であった。彼らにとってブルガリア語は仲間と話す言葉であり、ルーマニア語はよそ者と話す言葉に他ならないのである。実際に、後になって、親しくなった別のインフォーマントからの紹介で、最初のインフォーマントと再び交流を持ったときには、筆者ともブルガリア語だけで話すようになったばかりか、熱心に野菜の語彙の解説までしてくれた。

ブラネシュティ方言の言語資料の収集に当たっては、方言話者との対話をICレコーダーで録音することで、自然発話による音声資料の収集に努めた。その一方で、自然発話に出にくい言語形式などの確認のためにはアンケート調査も有効であり、そのようなアプローチも部分的に取り入れながら調査を進めた。収集した音声資料は合計で48時間に及び、そのうち、必要な箇所を中心に文字起こしを行い、ルーマニア語との言語接触による言語変化の観点から、主に形態統語論上の言語現象の記述や分析を行った。

基本的に、インフォーマントとの対話はブルガリア語のみで行ったものの、場合によって媒介言語としてルーマニア語も用いる必要があった。特に、方言語彙の意味の確認やアンケート調査を行う際に有効である。その一方で、ルーマニア的な語彙・表現などの使用によって、自然なブルガリア語の語彙・表現の使用が妨げられてしまうこともありうる。また、インフォーマントがバイリンガルであるがために、ルーマニア語の語彙・表現が一種の“スイッチ”となって、気づかないうちに使用言語がルーマニア語に移行してしまうこともしばしばあった。普段の生活の中でブルガリア語を話す機会がすっかりなくなってしまったインフォーマントの場合に特にそのような傾向がある。使用言語がルーマニア語に切り替わるたびに、「ブルガリア語で！」と声をかけると、何事もなかったように次の単語からブルガリア語に変わる。そのうちにまた別の“スイッチ”をきっかけにルーマニア語になり、ブルガリア語に戻り、というのを繰り返す。ルーマニア語に変わったことを指摘されると、「あれ、おかしいわね」とでも言わんばかりににこにここと笑うおばあさんの顔が忘れられない。

### 3. ヴァシラおばあさんとの出会い

ブラネシュティ方言話者のインフォーマントのなかで、ヴァシラおばあさんは特別である。彼女はブルガリア語ブラネシュティ方言を流暢に話す数少ないインフォーマントの一人であるばかりでなく、ブラネシュティでおそらく唯一の民衆歌謡の歌い手でもあった。子供のころから歌ってきた様々な歌をしっかりと覚えていて、その多くを筆者の前で披露してくれた。

ヴァシラおばあさんとの出会いのきっかけは、インフォーマントであった別の女性からの紹介である。ブラネシュティに残るブルガリア言語文化に関心を抱いていることを知ると、近所にブルガリア語の歌を歌える女性がいるとのことで、すぐに紹介してもらった。ヴァシラおばあさんは、ブルガリア語を話す怪しい異国人である筆者を、怪しむこともなくすぐに自分の部屋に招き入れてくれた。自己紹介と訪問の理由を一通り話し終えたあと、何か歌ってほしいとお願いすると、筆者の願いを快く受け入れて、Зьмни мъ, Добро「僕を選んでおくれ、ドブラ」という歌を披露してくれた。歌詞の内容は部分的にしかわからなかったのだが、ヴァシラおばあさんは丁寧に意味を解説してくれた。

ヴァシラおばあさんは、息子夫婦と孫娘の4人で暮らしていた。彼女の息子の結婚相手はルーマニア人であるため、家庭の言語はルーマニア語に移行し、子供の頃はブルガリア語を話していたその息子さえもブルガリア語を忘れてしまったのだそうだ。ヴァシラおばあさんに「家族や孫娘さんにブルガリア語を話してもらいたいですか？」と質問をしたことがある。「もちろんそうよ、でも『何その言葉は？知らないし、学びたくもないわ！』って言われるのよ」と言いつつ、それでもことあるごとにブルガ

リア語で孫娘に話しかけているヴァシラおばあさんの寂しそうな顔は目に焼き付いている。眼前でこのような光景が繰り返されることで、改めてブルガリア語ブラネシュティ方言が危機言語であることを実感すると同時に、ブラネシュティのブルガリア言語文化の記録を残すという使命感にかられたことを覚えている。フィールドに出て、インフォーマントと交流することがなければ、言葉を話す人の思いはもとより、彼らの言葉を研究することの意義ということにまでは考えが至らなかったであろうと思う。

ブラネシュティを再訪したときに、ヴァシラおばあさんに「あの歌は覚えてきたか？」と聞かれた。日本に帰ってから何度も聞き返していた筆者は「もちろん覚えてきた」と言って歌い始めると、彼女もそれに合わせて歌いだした。その様子を映像におさめたいと、とっさに手元のスマートフォンで動画撮影も行ったのだが、撮影後にヴァシラおばあさんは、「その機械は何か」と尋ねてきた。勝手にビデオ撮影したことを不快に思ったのかと心配したが、ビデオ撮影したことを正直に言うと、予想外にも彼女はとても喜び、「それは素晴らしい、本当に素晴らしい！」と言ってくれた。ほっと胸をなでおろしたのは良いのだが、そんな筆者にヴァシラおばあさんは、思いもしなかったことを言った。日本に帰ったら、その映像を家族や友人みんなに見せるように、と。ヴァシラおばあさんは、祖先から歌い継がれてきた歌を次の世代に歌い継ぎたかったはずだが、孫娘は関心がない。そんなところに、ブラネシュティの言葉や文化を学びたいと日本から訪問者がやって来たものだから、その想いを筆者に託そうと思ったのかもしれない。その後、遊び歌や儀礼歌など、実に様々な歌を筆者に披露してくれたわけだが、ついにはビデオ撮影の指導まで入る事態となった。「そんなに遠くからではちゃんと撮れないから、もっと近くで撮影しなさい」と。

#### 4. 結びにかえて（フィールドワークから考えたこと）

異国の地でマイノリティとして暮らす人々の言語はどのような影響を受けるのか、またどのように変化するのか。ブルガリア国外に居住するブルガリア系住民の言語の研究を始めたきっかけは、このような問いに対する答えを知りたいという個人的な欲求からであった。フィールドワークを通じて、それらの言葉を話す人々と実際に交流する中で、彼らが自分たちの言語文化に対して深い愛情と誇りを持っていることを知った。ルーマニアの田舎に住む彼らにとっては世界の果てからやってきた異国人が、彼らの言語文化に関心を寄せていることに最初は驚き、怪しみさえした。だが、幾度もブラネシュティを訪れるなかで、徐々にブラネシュティ方言を習得する筆者のことを家族のように受け入れてくれるようになった。筆者の両親や家族のことについても気にかけてくれたし、東日本大震災のあとには日本の人々のことを心配して心から見舞ってくれた。そのような心の交流が行われるなかで、単に自分の関心のためだけの

研究を行うのではなく、失われゆく彼らの言語文化の記録を残すことで、彼らに恩返しをしたいという気持ちが生まれるようになった。また、ブラネシュティの例を通して、マイノリティの言語文化の記録や保持のためにはどのようなことが必要であるかについて考えるようになり、これまでの記述言語学や文法論の立場に加えて、今後は社会言語学や地域研究のアプローチも踏まえた総合的な研究の必要性を実感するようになった。

フィールド調査に際して、ブラネシュティ方言話者のおじいさんやおばあさんに新たに出会うたびに、「おまえはブルガリア人か」と尋ねられたものである。いくら否定しても、半信半疑の顔をすることがあった。はじめのうちは、どうしてそのように考えるのか理解ができなかったが、あとになってわかった。ルーマニア語というマジョリティの言語空間の中で、いわば仲間内の言葉であるブルガリア語ブラネシュティ方言を話す日本人は、外見がどんなに異なっていようと彼らにとっては“ブルガリア人”以外の何物でもなかったわけである。言葉が、単なるコミュニケーションの手段にとどまらず、その言葉話す民族はもちろん、文化や生活、歴史などすべてを含むばかりか、彼らのアイデンティティそのものですらあることにあらためて気づかされた。フィールドワークを通じて、インフォーマントの暮らすところで時間を一緒に過ごすなかで、本来の目的である言葉の仕組みのみならず、むしろそれ以上のことを学ぶことになったのである。フィールドワークの醍醐味はまさにここにあるのではないだろうか。

最後に、この場を借りて、ブラネシュティのインフォーマントやコーディネーターなど調査に協力してくださった方々に対する感謝の念を表したい。異国の地からやってきた筆者の希望を理解し、その実現のためにあらゆる協力をしてくださった。特に、ヴァシラおばあさんは本当の孫、家族のように接してくれて、歌だけにとどまらず非常に多くのことを教えてくれた。2017年9月にブラネシュティを訪問した際にヴァシラおばあさんの家にも寄ったのだが、病床にあり、家族から面会を断られてしまった。その前年に会いに行ったときはゆっくり時間が取れず、次来た時にまたゆっくり話して歌いましょう、などと言っていたのに、結局それが実現することはなかった。

ブラネシュティのブルガリア言語文化の記録を残し、公開することを切に望んでいた彼女の意思に応じて、本稿の終わりに、「僕を選んでおくれ、ドブラ」の歌のブルガリア語による歌詞とその和訳、及び注釈を添える。なお、歌の書き起こし、及びテキストの解釈に際して、科学アカデミーブルガリア語研究所のケレミドチェヴァ教授にご助言を賜りました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

Зъмни мъ, Добро<sup>2</sup>

「僕を選んでおくれ、ドブラ」

- |   |                   |
|---|-------------------|
| 1. Зъмни <sup>3</sup> мъ <sup>4</sup> , Добро <sup>5</sup> , зъмни мъ                               | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 2. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ  | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 3. Къг <sup>6</sup> дъ тъ <sup>7</sup> зъмна бре <sup>8</sup> , Пётре <sup>9</sup>                  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 4. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре   | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 5. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ  | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 6. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ  | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 7. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре   | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 8. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре   | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 9. Удрежи <sup>10</sup> си <sup>11</sup> , Пётре, ушите   | 自分の耳を切り落としなさい、ペタル |
| 10. Удрежи си, Пётре, ушите   | 自分の耳を切り落としなさい、ペタル |
| 11. Пётър ушите си удр'азъл <sup>12</sup>   | ペタルは耳を切り落としました    |
| 12. Пётър ушите си удр'азъл   | ペタルは耳を切り落としました    |
| 13. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ   | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 14. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ   | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 15. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 16. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 17. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 18. Къг <sup>13</sup> си <sup>14</sup> чүту <sup>15</sup> бл'үту <sup>16</sup> мъгари <sup>17</sup> | 誰もが知る耳なしロバのあなたを   |
| 19. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 20. Кът си чүту бл'үту мъгари   | 誰もが知る耳なしロバのあなたを   |
| 21. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ   | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 22. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ   | 僕を選んでおくれ、ドブラ      |
| 23. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |
| 24. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре  | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル  |



- |   |                  |
|---|------------------|
| 53. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ               | 僕を選んでおくれ、ドブラ     |
| 54. Зъмни мъ, Добро, зъмни мъ               | 僕を選んでおくれ、ドブラ     |
| 55. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре              | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル |
| 56. Къг си чуту к'ор'о <sup>22</sup> мъгари | 誰もが知る目なしロバのあなたを  |
| 57. Къг дъ тъ зъмна бре, Пётре              | どうしてあなたを選ぼうか、ペタル |
| 58. Къг си чуту к'ор'о мъгари               | 誰もが知る目なしロバのあなたを  |

9. май 2012

Баба Васи́ла

в Брънещ, Румъния

## 解説

歌手であるヴァシラおばあさんによる解説は次のとおりである。

ペタルという男の子がドブラという美しい女の子に恋をした。しかし、ペタルは“頭が病気” (болнаў съз гльвагъ) であり、自分をパートナーとして選んでほしいとやって来るペタルをどのように断ればよいかとドブラは悩んだ。残酷なドブラは、ペタルの申し出を断るために、耳を切り落とすこと、鼻を切り落とすこと、目を取り出すことという条件を与えたところ、ペタルはすべて言われた通り実行してしまう。しかし、耳も鼻も目もない“ロバ”をどうしてパートナーとして選ぶことができるでしょう、とドブラは彼の申し出を断った。

## 注

- 1 民衆歌謡や習慣などブラネシュティのフォークロアを記録した小冊子である Popescu, E. 1997. *Brănești (sai) folclor, volumul II. Comunitatea “Bratstvo” a bulgarilor din România*. はブラネシュティのブルガリア言語文化の貴重な記録である。
- 2 書き起こしにあたっては、現代標準ブルガリア語の正書法に必ずしも拠らず、音声にできるだけ忠実に表記する。я, ю は用いず、語中では、先行する子音の口蓋化をあらわすアポストロフィと母音字 a, y で表す。母音 o の前に限って用いられる、先行する子音の口蓋化を表す記号 ъ も用いず、アポストロフィによる表記に統一する。また、東方言に特有のアクセントを持たない母音の弱化に加え、子音の同化も反映した表記を行う。
- 3 < зъмна = взема 「取る、(パートナー・結婚相手として) 選ぶ」 命令形 2 人称単数形。ブラネシュティ方言をはじめとする北東方言では、\*вЪЗДТИ > зЪМНА にあるように、\*ѣ は ъ

で対応する (Младенов 1993: 245)。このような反映形は、中期ブルガリア語における鼻母音の混同と関係している。

- 4 人称代名詞 1 人称単数対格クリティック形。北東方言に属するブラネシュティ方言では、1 人称単数対格、2 人称単数対格、再帰代名詞対格がそれぞれ、*мъ, тъ, съ* の形をとる。これは東方言に一般的な特徴であり (Стойков 1993: 250–255; Тетовска-Троева 2016: 86)、その起源は中期ブルガリア語における鼻母音の混同、あるいは東方言特有の母音弱化のいずれかであると考えられている (Мирчев 1963: 164)。
- 5 <Добра「ドブラ (女性の名前)」の呼格形。
- 6 = *как*, 後続する語頭が有声子音であるため、逆行同化により語末の子音 [к] が有声化。
- 7 人称代名詞 2 人称単数対格クリティック形。注 4 を参照。
- 8 民衆歌謡などで頻繁に用いられる助詞で、特に意味はもたず、音節数を増やすために用いられたりする。
- 9 Петър「ペタル」の呼格形。
- 10 = *отрежи* < *отрежа*「切り取る」の命令形 2 人称単数形。語頭の [o] は、東方言特有の母音弱化により、[y] として現れる。
- 11 後続の *ушите*「耳」にかかる所有を表す再帰代名詞与格クリティック形と考える。つまり、*ушите* とあわせて「自分の耳」と解釈する。11, 12 節の *ушите си* も参照のこと。
- 12 = *отрязъл* < *отрежа* の伝聞形完了過去 3 人称単数男性形。
- 13 = *каго*
- 14 < *съм*, 直説法現在 2 人称単数形。
- 15 = *чуто* < *чуя*, 受動過去分詞単数中性形。「聞かれる＝知られている、有名な」の意味でとる。標準語では、接頭辞 *про-* を伴った *прочут* が受動過去分詞起源の形容詞として「有名な」の意味で用いられることも参照のこと。ここで「誰もが知っている耳なしロバ」というのは、頭が“病気”であるペタルが、耳を切り落としたことで、村社会の中で知れ渡っていることを暗示していると考ええる。  
また、*чуту* の語尾の -y は、中性形語尾 -o が母音弱化したことによって生じた形である。中性形であるのは、あとの *магаре*「ロバ」にかかる修飾語であるため。
- 16 語源については不明。ただし、歌い手本人の説明によれば、この語は „*със уши малки*“「小さな耳を伴った」である。9 節～12 節の内容を踏まえると、耳を切り落としたことによって「耳なし」になっていることを指す形容詞であると考えられる。
- 17 = *магаре*「ロバ」、東方言特有の母音弱化により、アクセントを持たない音節の母音はそれぞれ [ъ] と [и] で現れているものと考ええる。
- 18 < *нос*「鼻」、男性単数形の後置定冠詞を伴う形。-o という後置定冠詞形をとるのは、北東方言群全体の特徴の一つ (cf. Стойков 1993: 102; Милетич 1989: 23)
- 19 33 節目は、歌い手の勘違いにより挿入されてしまったものと考えられる。本来期待されるのは、35 節と同じものである。
- 20 < *кърнено?* < *кърня*「木の枝を切る」の受動過去分詞中性形か。音節数の調整のために、語中の音節 (-не-) が脱落した結果、\**кърнено* から \**кърно* という形が得られたと考えられ

る。ただし、語末の中性形語尾は母音弱化により -y として現れている。一方、助言を求めた科学アカデミーブルガリア語研究所のケレミドチエヴァ教授 (проф. Керемидчиева) は、накърнено「損なわれた、不完全な」< накърня「全体の一部を損なう・奪う、完全性を損なう」と関係がある可能性について指摘した。ただし、このように考えた場合、接頭辞 на- も脱落したことを想定する必要がある。

いずれにせよ、歌手の解説によれば、кърну 自体は、「鼻がない」ことを意味するという。25 節～28 節 (鼻を切り落とすくだり) を受けている。

<sup>21</sup> = очите < око 「目」の後置定冠詞を伴った複数形。語頭の [y] は母音弱化による。

<sup>22</sup> < кьорав 「目の見えない、盲目の」、歌手がこの歌について説明している通常の発話の中では、この単語は к'ор'аў や к'ор'êф という形で用いられている。したがって、中性形の \*к'ор'аўо という形が想定されるのにもかかわらず、当該の歌では к'ор'о という形で実現している理由として、音節数の調整のための語中の音節 (-aў-) の脱落が考えられる。この点に関しては、注 20 も参照のこと。

また、к'ор'о が「盲目の」という意味であることは、45 節～48 節の歌詞の内容 (ペタルが目を取り出すくだり) と呼応している。

#### 参考文献

- Милетиц, Любомир. 1989. Източнобългарските говори, София: Издателство на БАН.  
(Translated from Miletich, Ljubomir. 1903. *Das Ostbulgarische*, Wien: A. Hölder)
- Мирчев, Кирил. 1963. Историческа граматика на българския език, София: Наука и изкуство.
- Младенов, Максим Сл. 1993. Българските говори в Румъния, София: Издателство на БАН.
- Стойков, Стойко. 1993. Българска диалектология, София: Издателство на БАН.
- Тетовска-Троева, Маргарита. et al. 2016. Български диалектен атлас, обобщаващ том, *IV*, Морфология, София: Издателство на БАН „Проф. Марин Дринов“.